

# 山陽スピリット ニュース



2016(平成28)年5月16日

学校法人 山陽学園

広報・山陽スピリット推進室 発行

## 布編むごとく

### 歴史を編む

創立130周年を迎える今年、山陽学園の歴史に改めて注目が集まっています。いっどこで誰が何をしてどんな影響を与えたのか、こんな話を先輩から伝え聞いているが本当の話なのか。歴史を知るといことは絶えず過去を問い続けることです。そして一枚の布を編むように、出来事という縦の糸と時の流れという横の糸を折り合わせていく作業でもあります。

この世のありとあらゆる存在が今日に至るまでには、それぞれ歴史があります。皆さんが今ここにいるということは、皆さんの家族の歴史でもあるのです。それでは、山陽学園の歴史はどのようなものか、歴史を知るにはどうすれば良いのでしょうか。

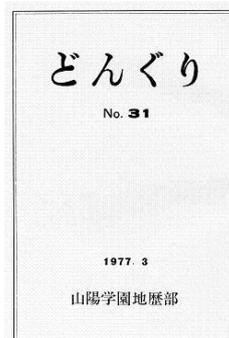
### 山陽学園の歴史書

山陽学園は節目ごとに学園の歴史をまとめた本を編纂しています。現存最古の歴史書は『五十年史』で、これは1冊しか現物がありません。岡山空襲の際に多くの貴重な史料が校舎もろとも灰になってしまいました。

戦争直後は全焼してしまった学校の復興で慌ただしく数十年が過ぎました。新しい校舎が次々と建ち、どんどんと増える生徒に校舎が間に合わない程でした。節目には冊子や写真集などを発行していましたが、学園の歴史書を編纂するまでには至っていませんでした。

そんな中、一人の教師が学園の歴史を掘り起

こし始めました。地歴部顧問の西川宏教諭です。生徒たちと共に西川先生は同窓生に手紙を送り、学校での記憶や思い出話を集めて、冊子「どんぐり」にまとめました。同時に、さまざまな文献や本を集めて調べ、山陽学園の創立に至る頃のことを残そうと努力しています。この取り組みは誰かに命令された仕事ではなく、西川先生は朝早くから自主的に図書館でもくもくと研究を続けていたといいます。



(↑)31号には現代語訳「山陽英和女学校設立趣旨」を掲載

そのことに注目したもう一人の人物がいます。校長の上代皓三先生です。皓三先生は西川先生に山陽学園の歴史書編纂を依頼しました。西川先生はこの時のことを「心が震える思いであった」と後に表現したそうです。これまでも注目されることのなかった取り組みがやっと認められたという思いだったのでしょう。

西川宏という一人の教師が上代皓三という校長に出会って完成したのが『山陽学園九十年史』であり、その後『山陽学園百年史』に引き継がれています。



かじろ こうそう  
上代 皓三 先生

1915(大正4)年に旧制六高に入学し、上代淑と出会う。20歳で上代淑の養子となり、翌年、九州帝大医学部に入学。34歳で文部省在外研究員としてドイツに留学。39歳で日本医科大学教授に就任、68歳まで務めた後に山陽学園へ赴任し、高校音楽科や短大開設などに尽力した。左写真は創立90年の時、撮影。

## 歴史書は「決して終わらない」

### という願いの結晶

ひっそりと研究を続けていた人物に目をとめた上代皓三校長。上代皓三先生ご自身、山陽学園の歴史の重要性を何度も説き、事あるごとに文章にしたためて、感謝する心を生徒や学生たちに伝え続けています。そして山陽に学んだ生徒や学生、園児たちを「山陽の子」として温かい眼差しで見つめています。

上代皓三先生は学生時代に上代淑先生と出会いました。医学の道に進み、ドイツ留学から帰国した後は日本医科大学で多くの後進の指導にあたりました。また音楽や文芸を愛し、自らもアララギ派の歌人として斎藤茂吉や土屋文明に出会い、多くの短歌を残しています。日本医科大学で上代皓三先生を知る人は「文理両道の人」と表現しています。

わづか百年のことといへども

絶えし跡は人の往来の傳はりがたし

上代 皓三

「わづか百年のことといっても絶えてしまった跡は人の行き来が伝わるのは難しいなあ」とため息混じりに悩ましげな表情をする皓三先生の顔が浮かんでくるようです。創立百周年を迎える直前、上代皓三先生は病床にありました。「百年という歴史は、決して百年で終わらない」という言葉を残して、創立百周年を待たずにこの世を去られました。しかしその願いは現在へと受け継がれ、山陽学園は創立130周年を迎えようとしているのです。

## 誰が歴史をつくるのか

山陽学園の歴史は誰がつくっているのでしょうか。歴史書の編集は数人が関わって行いますが、歴史そのものをつくるのは、皆さん方、一人ひとりの心なのです。

上代皓三先生は山陽学園の歴史を糸に例えてこのように語っています。「かつてここに学んだ少女たちが身をもって紡ぎ継いだその同じ糸を、現在ここに学ぶ少女たちも同じ心をもって紡ぎつづけているのであります。この糸に紡ぎこまれたものは、愛であり、奉仕の心であり、感謝の念であります」

この糸というのは時代とともに、時に強く太く、時に弱く細く変わりながら、さまざまな試練に耐え、切れることなく山陽の歴史の糸として学園に関わるすべての者が心を合わせてひたすら紡ぎ続けてきた努力の証です。

勉強、スポーツ、芸術・・・山陽学園に学ぶ一人ひとりが自分の目標を見つけて努力してきた跡が歴史を紡ぐ糸となり、大きな布となって今を迎えているのです。同窓生は「みさを」や「上代先生を語る」などを編纂して、その時代時代を映し出す貴重な史料を残しています。

そして、皆さんにも今の山陽学園の糸を紡ぐという使命があります。節目に在籍していた同窓生は昔を懐かしんで「私は創立〇周年に関わった」と口にします。一生に一度しかない山陽学園の130歳をともにお祝いする気持ちで、それぞれの一日一日を積み重ねましょう！

美しい日は美しい月を  
美しい月は美しい年を  
美しい年は美しい生涯を

(上代淑先生遺訓「日々の教え」1日)



**上代皓三記念講演会「山陽学園の仕事」 講師：笠井英夫先生**

2016年6月1日(水) 15:00～ 山陽学園大学・短期大学 本館301

5月22日は上代皓三先生のご命日です。皓三先生を偲んでご縁の深い笠井先生が講演されます。